

(第三種郵便物認可)

全国大会
全葬連
全秋田

「死をタブー視せず」

パネル討論 壇蜜さんが経験踏まえ提起

全国1300社以上の葬儀社が加盟する全日本葬祭業協同組合連合会（全葬連）石井時明会長（全葬連）の第66回秋田大会が10月18日、秋田県秋田市内のホテルで開催された。彬子女王殿下が来賓



タレントの壇蜜さんが参加したパネル討論

として式典に臨席し、コロナ禍にあっても人を悼む行為や葬儀の重要性がより強く感じられた。大会を葬祭文化の大切さを改めて認識し、伝え守っていくことの機会にした。彬子女王殿下が来賓

石井会長は、横浜で昨年開催した世界葬儀連盟創立50周年、全葬連65周年大会に続き、彬子殿下の臨席に感謝。人をおくことの大切さの思いを致し、「秋田大会を色んな意味で新たな出発になるような大会にできれば」と話した。

記念講演は、終活情報誌「ソナエ」元編集長の赤堀正卓氏（産経新聞出版専務取締役）が「葬儀社の広報戦略について」と題して講演。一般に向けて実施したアンケート結果を交え、加盟葬儀社としての特徴を踏まえた広報を提案した。

「死とは何かを考えずに安ければいいという風潮がある。儀式の大切さとは何か、もっと死について考えてもらう必要がある」と意見。コロナ禍以降でも自社の売り上げが増加しているという遠藤氏は「これまでのお葬式にお金をかける価値がないと思われていないか。

開催地の秋田県葬祭業協同組合の半田雅之理事長は、人口減による葬儀の変化に危機感を示しつつ、「今後は今以上に遺族に寄り添った葬祭サービス」の提供と、葬祭業の意義をしっかりと消費者に伝えていかなければならない」と話した。

式典の最後は「葬送儀礼文化の継承と発展がわれわれ全葬連に課された使命」として大会決議を採択。来年の67回全国大会は愛媛県で開催することが発表された。

故人と最後に話す空間時間の壇蜜さんや全葬連副会長の加藤久智氏、秋田協理理事の遠藤元也氏のパネル討論が行われた。葬儀の簡略化が進む傾向について、加藤氏は「死とは何かを考えずに安ければいいという風潮がある。儀式の大切さとは何か、もっと死について考えてもらう必要がある」と意見。コロナ禍以降でも自社の売り上げが増加しているという遠藤氏は「これまでのお葬式にお金をかける価値がないと思われていないか。

故人と最後に話す空間時間の壇蜜さんや全葬連副会長の加藤久智氏、秋田協理理事の遠藤元也氏のパネル討論が行われた。葬儀の簡略化が進む傾向について、加藤氏は「死とは何かを考えずに安ければいいという風潮がある。儀式の大切さとは何か、もっと死について考えてもらう必要がある」と意見。コロナ禍以降でも自社の売り上げが増加しているという遠藤氏は「これまでのお葬式にお金をかける価値がないと思われていないか。

「視している場合じゃない。常に死と隣り合わせの状況の中でも死ぬ前にもっと話したいという思いが少なからずあった」と死をタブー視せず、話し合う必要性を語った。